



文政略加
り仁白公羽編

よ
な
草

全



貞享元子東武在庵

まはらーや草餅は穂よ出はるる母 蕉翁

こは青さーとまものちまは早く穂の出るまきを

穂を後とり乃に之實印してさめと挽き實と皮や

箕よそ敷糸ーサーまはらる実を吟みなりさー

わらまは穂なれまはらーはまあまらう貧家

らく白翁編



新麦の出来時に用いた稂なり菓子少し宜しく
清少納言枕草紙より「麦は」云々の語を人の
かき集むる紙を「唐紙」と云ふは、
ぬきこしおろしこし

一条院の店定より宮中より「麦」を
たふし「事」あり「世」を「こ」し「美葉集」
「まのり」に「麦」を「物」の「なれ」と「猿」を「く」

たも飛うてぬきこし「美葉集」
猿マヒ越コシ
上下略

終と「は」り「つ」て「麦」と「志」る「路」を「す」ま「草紙」
乃趣なり長徳乃年同なれ「美」乃「美」ら「さ」
ひん「ふ」し「万葉古今集」を「教」は「わ」な「る」を「あ」き
む「免」官「ま」し「そ」ら「ふ」ん「じ」て「も」紙「したる」ぬ
世「な」れ「ま」せ「越」と「い」ふ「を」店「も」も「麦」の「事」と「聞」
と「り」の「あ」其「世」に「あ」ひ「を」た「り」し「路」を「あ」る「ぬ」

蕉翁おぬむをまきし〜の昔くろく〜
草餅の穂みおし〜とめて奥し〜
乃とる合せたふら〜や

貞享三五年

夕日新所中よぬふこ〜

蕉翁

貞享四年

夕日新所中よぬふこ〜

其角

この二章は柔く同物、際のおふ〜
あてさ〜

まね勝あるよ柳を〜
と〜

貞享四年

誰や〜のぬめ〜
蕉翁

河書よ嵐雪、許より正月お袖を〜
とあり 翁は川を葎年越の時を〜
木綿お節衣を〜
ま〜

己ごとと大晦日の夕方きり——きり節着つと
と春のよき縮まてて——まの勢——を本綿
なすさあを不機嫌の体なれとも大晦日なれと
は習屋きり手りもなまれと冷方なくよき縮を
着るふえりか吟なりとまり其角嵐雪を始
門人のくく上服を用ゆ月を解更なりと
月そのりな利とも翁の上服をすめのゆるとも

取——縮ハきりも異服店も——注文取返
たる趣は偽りよき縮をまをまの勢——とく
芭蕉翁も三界無所住の大隠なれと衣食乃
美をぬむしはあは勿論なを先代旧事記も
人畜の異者依衣服有無尊卑之差者依衣服品
別とまり

貞享五年
あこくぞのよき縮をきり節着は芭蕉翁

紀貫之たさ形多を阿古久曾といへ貫之初瀬
へまゝて傳りて「吾の詞書」梅の花を打
きしよしよとありて「人」の語は
きしよぬるさやとを蒼そびく乃香よ匂ひきり
と詠りて「をねよ貫之故郷又多りて歌あ
こくそとつひ」此の梅今もさるりくせう
匂ひ形つひと此の香のきほいとあをれなり

と祖翁のたかきよあこくそと置あふ故あおひ
たかきよ〜〜〜はあ梅をさ〜〜
香よはりぬるさとあふるきを花と詠あ
こくそ詞書の梅を打てとあるからあよ
花とよあふるぬるさ詞書に再釈となぬ
や〜に詠通きあふのな〜ひよ〜かくよまれ
〜〜其のたかきよ〜〜はな〜祖翁を梅

とてその言を感へたるなる也

別海あこくぞと濁るなりとハ神代卷

或も大抜なると屎クツとある哉高貴乃御前

よへ上み言の俚をイキキ避てそ我濁るなりと

しと云ふに近世古事記傳おそを濁る能

はのことなれ古書は嫌ひし事なり

濁音よりよまよひし事なり

より又垂加靈社の葎塩草より清濁の沙汰

なり又吉川家敬受れ人乃云食物を人の

精氣を悉ひし其屑を下に屎なりと

ゆいありくとある處き訓なりと云り

とされたりと云ふは用おきあけし

よてみふも時宜よしと云ふも潔な

かる也

元禄五年

之形月や鯛をあさとも塩うら

蕉翁

沼川を浅瀬を河原を鯛よりハ塩鯨糸掃

なるそ句他を古々の取合なる

こな月や君りるさげはあひそめてうくてぬ

鯛を今もありまうと云ふれぬまへなれ

そとびあのを鯛とよむゆねの国味^{アチカ}の浦

弘多物よそ若狭小鯛無津之海鯛のたごひ所

乃名おなまぬ——うき鯛の旬をまふ友の百

とつんえく

うき鯛の名や桜らう三四月 遠慮支考句し

水きりやうききる魚の舟 備後未南句し

あつ野集
佐保娘やあらの面う那う舞 嵐彈

まのれ造化の神をさかひめうてまふをほす

神とよ深面を能^{フカイヨモテ}癒ふ月ゆる面をぞうく

眉のあは面なり 竜田百萬 藤戸三井寺名

葛城も用也

あふ野集

狩野桶の麻をなめきり 秋の山 荷分

河書は狩野桶といふおと其角の銭は送ふと

あふ予むく江戸縁屏の比すーと加ふ場を食

物を入あ送ふと大か殺とありて其糸利なあ

おのより捲もみやりのおと又もさりこせを狩

野桶といふ又文政八周年江戸六草庵の法中乃

白は狩野桶売は書くや雑子のこゑとふ

摺和のりありありとよかす場の所なりとあ

を信濃の何丸と云人逃き出大鏡と云俳書を

おせーの女何らうくのほよか乃おけと仮名紙付

てこれハ狩野元信もくしてあふーはあひさ記

桶は茶島など馬子こせを販て朝夕の科とる

と書り前よりふるゝ悪きん何丸のし解るけ

くこき事とそおもひあ

猿蓑集秋の部

あやまりてぎくく 押ゆる鱗の形 嵐蘭

猿蓑住ちを蒼門寂才一乃冊子うて撰者も

去来凡兆序を其角跋を僧丈州何事とく

上足英勇能人くみりて蒼翁照見を句滂なれ

魚しきつあまこる秋の部あまのりときり

不審ありとくとも不也浅識の歩簾等きとあて

ひあきくく後の愆とも思ながらひ道の修

行を令弟守賢とありと祖翁の令言る

對してさしきひう言をりやも且もやひの忠

節とたもくくは高を思^恐しけあけつゝいをり

ものまうらん ぎくうと云魚貞徳以来四季題

名の書よんえねくやまのたなるく 鱗^{カシク}の秋の

おのり急清亮なるを捕し之の季^{二節}なり
載せりゆるん鼠蘭々吟詠あふも尺之^{カク}鱗
結了急をさく白姿ありあは夏季なる川物と
按川を樞切川^{カク}と云魚獵の体ありかき^{カク}ひき
うと鱗^{カク}ともた季^{カク}節^{カク}終^{カク}く白^{カク}此^{カク}凡^{カク}次^{カク}め^{カク}川^{カク}物
乃^{カク}実^{カク}情^{カク}あり^{カク}何^{カク}と^{カク}無^{カク}季^{カク}も^{カク}何^{カク}と^{カク}形^{カク}く^{カク}夏^{カク}季^{カク}を
倚^{カク}く^{カク}新^{カク}汽^{カク}蘭^{カク}々^{カク}終^{カク}骨^{カク}定^{カク}め^{カク}妙^{カク}り^{カク}感^{カク}へ^{カク}き

白とそえく傳る翁の^{カク}や^{カク}り^{カク}や^{カク}さ^{カク}る^{カク}は^{カク}る^{カク}勢
し^{カク}る^{カク}猿^{カク}乃^{カク}面^{カク}と^{カク}季^{カク}も^{カク}と^{カク}る^{カク}座^{カク}す^{カク}の^{カク}り^{カク}て^{カク}お^{カク}ま^{カク}の
白^{カク}姿^{カク}動^{カク}き^{カク}係^{カク}あ^{カク}り^{カク}す^{カク}あ^{カク}る^{カク}季^{カク}節^{カク}り^{カク}て^{カク}葉
あ^{カク}は^{カク}あ^{カク}れ^{カク}と^{カク}甘^{カク}季^{カク}も^{カク}そ^{カク}自^{カク}然^{カク}と^{カク}ま^{カク}季^{カク}節^{カク}あ^{カク}り^{カク}れ
侍^{カク}る^{カク}ま^{カク}り^{カク}白^{カク}と^{カク}意^{カク}あ^{カク}る^{カク}の^{カク}あ^{カク}り^{カク}凡^{カク}雅^{カク}の^{カク}ま^{カク}を^{カク}終^{カク}り
こと^{カク}か^{カク}き^{カク}所^{カク}なる^{カク}あ^{カク}り^{カク}撰^{カク}者^{カク}ぬ^{カク}れ^{カク}去^{カク}来^{カク}凡^{カク}兆^{カク}それ
を^{カク}一^{カク}ら^{カク}さ^{カク}る^{カク}は^{カク}あ^{カク}り^{カク}杖^{カク}の^{カク}部^{カク}も^{カク}入^{カク}り^{カク}ハ^{カク}り^{カク}なる

意味がある人同まほ——これと百年後隔
おれいせんすを形——又杉の部に入
しる事撰集乃席念形りとも鹿念を
君子もし有るれハ不思議したるを
○ぞびる色層赤き小魚を俗にサスといふ
川急なり脊鱗お針ありむさと捕らるるに
宜ありたてゑる魚——

○かづ四季題名秋よおて夜鳴小魚之ニテ圖會
ハ黃鯨魚 黃魚 俗五里ハ一名加之加 和名抄
加良加古 似鮭而類著 鈎金澤淺野川ハ多其聲
五里々々といふこと 所々山谷石間ハ小魚
不過一寸又一種長一二寸斑文あり 形状似河
豚而小其大者至夜鳴聲清亮し 可愛ト云
俳書ハ鱗乃字或ハ河鹿石斑魚俗ハコリ或ハ

千、カフ 又大草家料理と云其書云曰

一越川鱈と云ハカタクと云魚をせよ——カ——
焼加らち——よ盛なり

一越川汁といふをかづのといふ魚を舟の子白瓜
なと入調ありなり夏の汁は賞翫なり冬も
ちる事あり略——てくをす事し右

この書のより近末群書類後とつてありしお傳

よ——大草家といふも足利の時代なる也

かづの鱈かづ汁も夏は川 狩魚獵の時節
鱈カク勿論ありて沖鱈といふは沖におて魚を

りてき海漁とさう——とて湖やる船中の業也

てせよ——と川魚を河を早瀬に流さして

なると魚——三餘抄に鱈を流魚家解活なるを

用ひ血を洗ひ淨く醋を和すと云せり

瀬は淀川の名越川と川は淀川の名なれ
魚一や行考魚一

細けがらの事私考者流より鱧鱧なるも

えて魚はあはれとありて及るもいりありあり

てりありあり前章よりいりりり和漢三文圖會

和名抄大和本草を始三餘抄等其外教多

能古書ふもかたりり能なる事五といりり

尺ねと古漢の化例よりて何處を供よ云

ちりりりの事として既とりり説をとりりり

魚一名二物とある魚とれ編固りりり

ふりり有魚かりりりりりりりり

五元集

稲妻やろりりりりりりりりりり 其角

此りりりりりりりりりりりりりりりりり

事りりりりりりりりりりりりりりりりり

祖公羽其言を好くて「福妻や言のかゝ
新五位の^聲野を吟や句作をかくある
きしとの終ひ——そより其角く白は是氷を
洗たふりて予これをおよぼ其角くつゝ思——
きよまあ〜おとあ羽の判るき〜やあ〜と
人皆其角く化あるをまひて道を換ふ事有
魚——作あるし好し必^たそああるはなれ其角く

白は是氷をの終り候——き〜つゝ好むと
酒うめなる魚——化を好き事翁う
かき〜はあ好道しきあ——あり

基後新屋
白ら言ぬ人よゆらぬ〜室い〜子の白は昔ハ〜して
後換おた
日暮りれいあ〜人し那——白木らる言はれ昔し〜り
後れのお白木好切乃彩色志るま〜け〜か〜との

汗あ〜よ——

元禄六酉年

巧くまきれる嶋の浮草花は足よりりき 蕉翁

東武より露法公の亭は吟なるとけ与其基石
祐蓋法師亦ハ言旨法印の流なと亦七嶋の
浮草花は海中ニある芦花の莖をたのミ果をクキ
似る也ハ海を深くエらひミ果ニ浮沈ある
亦ハ浮草花多あり流ききよよしのニあると
ちり忘らふは古き亦ちとハ流き厚みある也あり

「子もおもいはぬは浮草花のしよを捨てしや
するん處りもせぬと輕政の詠ありつらきこの
是なるや五月雨は浮草乃也らんと世とはれ
の意とし

貞享五年

山流花乃何やゆの一きれ草 蕉翁

湖春の心もまみしハ山流乃まるんと世はれ終
他皆巧なりといふも亦なきあやまり

なるもとより去來のつとく山海を昔を詠む
哥多しとくに湖裏に地下の交通者なり
いふ歌を詠しらすまんといふつこのな
白双葉も又去來抄の中をよみは海あり
ありらく此をを湖春も山海の上れとや
あやまりて詠しらすとやあゝのうや山海木
ととあまの山海よる里めきく所へおたふし昔

をこれいふとあやを詠評とて後得
かゝり又去來もけりか編にほひつと
詠みせんさくなりあやも山海よるを
よると同詠しらすとやあゝの事い真喜え
甲子仲秋翁海川の序をおきて

野はらとて詠む風の志むる那とらふ
る矢立の娘とてと海道より伊勢伊賀山城

尾張と推歴ありてまをる山家二年を越え
 丑のまゝあり大津へ出るひ——途中の吟る
 この紀り我甲子吟行とあるを其の後印刷る
 多れハ人々書写しそあやまり傳へし多し
 既る明治五年月下より人甲子吟行の字本
 をもてアタリあや上木して標題を改し
 紀りとせし小冊子を改せりあやまり多し

自ら心より祖の門人孫々々々書
 き多し——其冊子ハ後々々々何れと流出
 せりは類ひの字本なりんを湖春七撰しあり
 ありあつた那——

元禄三年

誰人の手次等乃ある 蕉翁

此の書はよやと述べて後年をひくると
 ありて乃をきりし……

今もかゝるぬよや翁立世の門人世筋子門此
の意致ひくと尋ゆか—時祖翁よかの返
書あり日文に曰

五百年のせり—西り撰集抄よ多く此乞食

をあげられ
をあげしゆるる家等息眼のやよま人をん

付しゆるるかみさるぬしむ西上人をあげしゆり

しゆるるるはなるとらこのおのぬし今既

その飯塚の人取持せかとそさてこ此はゆりまて

はしり—おしひくのまにるおまるとひ九重乃

都は出ると大かこの人おしりまといま大佛—

金ひ寺結結兼やあるひひ芝居所のまりれ

業をとたおひ又の御堂あ—山乃生るるをゆる

人の預乃さゆりなる中は西上人改おもひかし

あしゆるるよとるお徳のあしゆるる

返書よりきやとその句をいひしもの抄り
信ありはれりし未ぬる此筋子門たる
し道すまてあまーしききしきし

元禄六年
おや 神政帳をあられて七多羅樹 其角

晋子父乃病中を慮ふれ吟なり父以授東順
とらふらむは河書長文なれり略しと爰より
寸病父待期の盃をとりし悲別的情欲たをば

の世乃ほよむたれい糸息のかまらん所成厭離せよ
とおもひ切らる暇乞是受持法華の正眼成へり
とあり合文ハ秋結家と云晋子ハ撰集よりる想り
さて幾句の七多羅樹の法華の二十七品に於て
經あり王の子二人その父をあらふは躍て虚空
にある事七多羅樹種ハ神変を現しし
父王のくは浄く信解せしむとある經文乃

と海をとりて其角父をおもふなり
て涼しかりしめんとや其角は父あり父の子二
人なれば妙法蓮華王の趣を信受して七多羅樹
とら置けり那らん序は云佛経は終くあり七
多羅樹虚空の言きをりなり一多羅樹の言
七尺とあり其七尺と云は七尺とて七尺は四丈九尺と
それを又七多羅樹は三十四丈三尺と云ふなり

されとも天竺の一尺を吾邦の曲尺とて四寸一分なり
と云ふ日本は十四丈六寸三分成り一尺とて此尺
すのちあるなり又刊なきはむさうの竹を動
きたりぬ病るはと方一動なきは竹をこれとん
なり人あしき人し船ありしうらうとたもひて
かえ竹を何そんはむさうのとならんやけま
いこれそせなれとおもひて一とていふよりぬ一

し我書ほつ事よとなりぬ

五元集

こはぬのそ大根て清さん秋の月 其角

洞書は松前能君のP送り信るとありこそ吹

とりつる陸奥出羽乃とよそりあよーしく

空の量うしふをちよし東地記又えしものこそ

詳ふ志くさきと白意さしそ形くさし我かまはる日

万葉集よかあり「いふのこはるもそすし」

ぬく能急そよふんせそぬ能の月このあかん

ぬすくし其角し秋の月といひしるしや又かハ惟

夷者ま方のしそ成を吹そいしそ是す術あり

是張胡砂吹といふより常に是るをしそそし

云と能又其角の大根て清さんといひし延書守書と

云よ李師逃難入石窟中賊以烟熏之垂死摸得ササリユラ 菴

菴菜一束嚼汗ラカミシリ 嚙下クミクモコニスル 甦ササ と云々又ある人云昔山脇

道作富士裾野にて急病危篤に及べり山
 中醫業を求めんとし一郡一所乃老農夫求
 りこれ合く山氣にあたりまふ成る一は息をそそ
 あは事なりとて大根の汁を飲しむたらまら
 生活ありし事漫遊雜記にありといひり
 元禄七成年
 不松前思

この夜や行人形——秋のこれ 蕉翁

祖翁の句におかしき所思の題をこぼれ然しそ
 句意を題にありしは後以て存する事なり清
 哥も其感思の題をあれを感あるは後しや能
 深之又所思は以爲といふのこたて相感し
 あえれなるは感思の題に似る成るしやす
 登て題よりて其句意感得する事あり

管見のおしむるをきく止て活字乃かえさまの
ものたまた

十六日
初編終

附録

所思

際のちりり物くきく形あり机を申

王子稲荷

初午に氣がほく坊主と恵の籠

和備酒

きりり物くきく形あり机を申

くめ笑やかきく小枝と寶物

おぼろげな家

く〜流〜と〜ゆ〜

笛中明日を夢れ〜行か〜す

梅陰の納涼

木かれや鳥もほ〜ゆるさ〜

夕月の〜の〜の〜

夕月〜と〜

名月やめあ人の老い〜

老懐

ちりねふ家き〜ぬ〜そ〜

松嶋団圓

稲つまや碎け〜な〜千松の向

ら路〜

初時雨とふさぬ〜お〜

月夜おの〜と〜

わさ〜お〜

穢の香ふけて師走乃三笠川

右四季十草白菊居士

かそぬぬふ〜吹けよ〜那〜草子花苗又た
まといれん〜乳の〜の〜衰滅〜さる草の
ひ乃ち毛も限あ終え塵も結るぬらさ糸
乃たこの義別道とたまぬるよ相 花ひ
草のふみかくはれそ取〜ゆりの初句
と〜さそこのまら〜に書ら〜るり我庵乃

志の比昔下より好しなるを人の心はく
此事やとてさるかるればおほやけにす
るぬれとて人の心を物に問ひ
しそはるはるなりおほくはれと
るかきく人々李元跋

蕉門書林
皇都寺町通二條
橋屋治兵衛梓



